

悪魔の人形

あるところに、古くて大きな家があった。10年くらい前まで、その家には、大金持ちの家族が住んでいた。でも、ある日、泥棒がその家に入り、その家のお金や宝石をすべて盗んだうえに、家族を全員殺してしまったらしい。本当か嘘かは、わからない。でも、ぼくのおじいちゃんが、そう言っていた。おじいちゃんは、低くてこわい声でゆっくりその話をしたから、ぼくはほとんど泣きそうになってしまったけど、なんとかがまんした。

今、その家には誰も住んでいない。家の中は昼でも真っ暗で、窓ガラスは、ところどころ割れている。庭は草がぼうぼうで、ときどき、黒い猫やカラスが不気味な声で鳴いている。ぼくたち小学生は、その家を「悪魔の家」と呼んでいる。

夏休みのある日、タケルがぼくに言った。

「聞いた？ アキが言ってたんだけど、昨日の夜、『悪魔の家』から叫び声が聞こえたんだって。」

タケルもアキも、同じクラスの友だちだ。

ぼくは、そんなの全然怖くないというふりをしながら、こう言った。

「へえ。ぼくもあの家で、叫び声を聞いたことがあるよ。」

これは嘘だ。ぼくは、おじいちゃんの話聞いてからは、絶対に「悪魔の家」に

近づかないようにしていた。

タケルは

「今日の夜、ふたりであの家に行ってみようぜ。」

と言った。

ぼくは、ついつい、

「いいね、行こう、行こう。」

と言ってしまったが、心の中では（やばい、どうしよう）と思っていた。

夕方、タケルがぼくの家に来た。ぼくは、お父さんとお母さんに

「みんなと公園で花火してくる。タケルのお父さんもいっしょにいるから大丈夫。」

と言って、家を出た。もちろん、これも嘘だ。

「悪魔の家」へ向かう途中、タケルはずっと興奮していた。

「悪魔って、マジでいるのかな？ マジでいたら、どうする？」

ぼくは、

「いるわけないじゃん。」

と言いながら笑った。笑ったつもりだったけど、心の中では（やばい、やばい、
どうしよう、こわい）と思っていたから、うまく笑えなかったかもしれない。

タケルは早口で、いろいろしゃべっていた。ぼくは、ほとんど聞いていなかった。
そして、気づいたら、ぼくたちは「悪魔の家」の入り口にいた。あたりはすっかり暗くなっていた。

タケルが「悪魔の家」のドアを引く。ぎいーという不気味な音が鳴って、ドア
が静かに開く。家の中は真っ暗だ。がさがさっと音がして、何か小さな物が動く。
ねずみか、ねこか。

タケルが

「うわっ！」

と叫ぶ。

ぼくも

「なに!? なに!？」

と叫んで、タケルの服をつかむ。

「あー、なんだ、くもの巣か。」

タケルが言う。暗くてよく見えないが、どうやら、家の中はくもの巣だらけのようだ。

「うわっ！」

今度はぼくが叫ぶ。タケルも

「なに!? なに!？」

と叫んで、ぼくの服をつかむ。足もとに何かある。何かを踏んでしまった。窓から月の光が入ってきて、少しずつ周りが見えるようになる。ぼくが踏んでしまった物は人形だ。古い人形の目が、ぼくを見ている。

よく見ると、その家の中には、不気味な古い人形がたくさん並んでいる。しかも、月の光で、人形たちの目が光っている。

タケルが言った。

「な、なんか、こいつら、おれらを見てない？ まさか、生きてる？」

ぼくは、怖くて怖くて

「もう帰ろうよ。」

と言った。そのとき、タケルが言った。

「悪魔の人形！」

ぼくは、その場から逃げ出した。後ろを見ないで、とにかく自分の家まで必死に走った。家の前で止まると、後ろからタケルが追いかけてきた。ぼくもタケルも汗だくになっていた。

「どうしたんだよ。急に走り出すから、びっくりしたじゃん。」

タケルが言った。ぼくは、たくさん走ったのと、まだ怖いので、うまく返事をするができなかった。タケルは怖くなかったのかな。

タケルは興奮して話し続けた。

「でも、ちょっと怖かったなあ。古い人形が全部、こっち見てる感じがして。まあ、でも、1つだけ、かわいい人形があって、なんだこれ？ って感じだったよな。なんか、ウケた。」

かわいい人形？ 何のことだろう。

タケルが続ける。

「でも、おれが笑いながら『くまの人形！』って言ったとたんに、おまえ、逃げちゃったじゃん。どうしたの？」

ぼくは頭の中で考えた。悪魔の人形……あくまの人形……。あ！

ぼくは

「いや、別に……。そろそろ、家に帰らないと、お母さんに怒られると思って。

だから急いで帰っただけ。」

と言った。もちろん、これも嘘だ。

夏休みが終わって、小学校がはじまった。タケルとぼくは「悪魔の家」に行ったことを、クラスみんなに自慢した。

ぼくは言った。

「あの家には、古い人形がいっぱい並んでたよ。」

タケルが続けて言った。

「で、人形の目が全部光って、おれらを見てた。」

「めっちゃ怖かったよな。」

「そうそう。しかもその人形が、少しずつ動いて……。」

ぼくたち二人の話は、途中から嘘になった。どこからが嘘なのかは、二人だけの秘密だ。

そして、ぼくが「くまの人形」で逃げ出したことは、ぼく一人だけの秘密だ。

(1999 字)

(2022.1 Written by Junko SATO)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.